

多職種チーム医療における 心理療法士のスキルと有用性

野村れいか[†]第70回国立病院総合医学会
(平成28年11月11日 於 沖縄)

IRYO Vol. 71 No. 8/9 (335-337) 2017

要旨

近年、チーム医療が推進され、国立病院機構の各施設において多職種でのアプローチが行われている。これまで心理療法士は精神科領域で多く採用されていたが、最近ではがんやヒト免疫不全ウイルス (human immuno-deficiency virus : HIV) などの政策医療においても多職種チーム医療の一員として採用され、小児科や産科、神経内科など心理療法士の活動する領域は拡大し、各領域で他職種と協働している。しかし、心理的アプローチの専門職である心理療法士はチームの中で比較的新しく参入した職種であり、国家資格ではないため、他職種にはその役割や有用性がわかりにくいと考えられる。今後、多職種チーム医療を推進する上でも心理療法士の役割や有用性を他職種に伝えることが必要であると考えられる。

また、国立病院機構においては職種ごとに協議会があり、教育や研修システムが整備されてきたが、心理療法士は2014年ようやく協議会が発足した。国家資格についてもこれまで多くの議論がなされてきたが、2018年には「公認心理師」という名称で国家資格となる。専門職としてこれまで以上に機能していくことが求められるが、これまで心理療法士として必要なスキルの獲得や専門性の向上は個人の資質や裁量に委ねられ、体系立った研修や教育システムがなかった。

そこで今回のシンポジウムでは、他職種に心理療法士の役割と有用性を伝えるとともに、心理療法士が身につけるスキルの階梯と研修のあり方について検討することを目的とした。まず始めに、精神科、がん、HIVの領域で10年以上の経験を積んだ心理療法士がそれぞれの立場で①心理療法士として活用できたスキル、②実務から身につけたスキル、③多職種チームへの貢献について報告を行った。さらに指定討論において、医師および看護師の立場から心理療法士に必要なスキルや研修のあり方について助言を受け、今後の研修や教育システムの構築について検討することができた。

キーワード 多職種チーム, 心理療法士, 心理的アプローチ

国立病院機構琉球病院 リハビリテーション科心理療法室 †心理療法士
著者連絡先：沖縄国際大学 〒901-2701 沖縄県宜野湾市字宜野湾 2-6-1
e-mail : reikanm@movie.ocn.ne.jp

(平成29年3月1日受付, 平成29年5月12日受理)

Skills and Usefulness of Clinical Psychologists in Multidisciplinary Team
Nomura Reika, NHO Ryukyu Hospital

(Received Mar. 1, 2017, Accepted May. 12, 2017)

Key Words : multidisciplinary team, clinical psychologist, psychological approach

はじめに

多職種チーム医療における心理療法士の増加および業務内容の拡大にともない、他職種に心理療法士の役割と有用性を伝えるとともに、2018年に「公認心理師」として心理職が国家資格になる前に、心理療法士が身につけるスキルの階梯と研修のあり方について検討することは重要であると考え、そこで、今回のシンポジウムでは「多職種チームにおける心理的アプローチの展開」をサブタイトルとし、精神科、がん、ヒト免疫不全ウイルス（human immunodeficiency virus: HIV）の領域から①心理療法士として活用できたスキル、②実務から身につけたスキル、③多職種チームへの貢献について報告を行い、心理療法士の役割や有用性、研修のあり方について検討した（①-③は次項の表記①-③と対応する）。

精神科病院の立場から

榊原病院の壁屋康洋氏には、精神科病院で働く心理療法士のスキルと有用性について報告いただいた。急性期病棟のクリティカルパスの作成や心理教育に始まり、アルコール依存症治療、医療観察法病棟の立ち上げなど、精神科におけるさまざまな疾患・領域での体験を踏まえ、①個別面接のスキルや統計学を活かし、臨床および研究に貢献してきたこと、②グループのファシリテートや研究で用いられる検査、多職種チーム、心理社会的治療の構造化について実務を通して身につけ、③上記の①②を基盤として、アセスメントや治療プログラムの導入と開発など治療を構造化することで多職種チームへ貢献してきたことが報告された。

さらに、前任地（肥前精神医療センター）で培った心理療法士としてのスキルを活用し、院内の接遇研修や精神科専門療法委員会、パス委員会等を展開していた。経年別に実践を通して身につけたスキルやチーム医療の中で果たした役割について提示され、多職種チーム医療にとどまらず、組織運営にも寄与するスキルは心理療法士の育成だけでなく、管理的立場にある主任心理療法士および心理療法室長の育成や研修にも活かせるものである。

HIV 領域の立場から

九州医療センターの辻麻理子氏には、HIV 領域で働く心理士として報告いただいた。HIV 領域において心理療法士は、HIV 感染症コントロールの維持と感染拡大予防に寄与する心理支援を目的とし、メンタルヘルス問題のアセスメントと支援を行っている。患者に対する心理支援および HIV 中核拠点病院として実施したさまざまな事業を通して、①内科他職種が専門外とする精神科の問題への対応や外部機関への紹介をアセスメントや心理面接により支援すること、② HIV 検査相談や実臨床に従事する専門職向けの研修会の企画運営、グループワークのファシリテートについて実務から身につけ、③厚生労働省科学研究や財団主催の全国研修会の運営、地域での研修会の立ち上げなど、多職種協働の体制整備を行っていた。さらに、内科診療で患者、他職種が活用できる心理アセスメント（HAND 神経心理学的検査）や心理支援の提供により、他職種が患者の心理状態や認知的特徴をより具体的に理解することに貢献していることが報告された。

病院内の対患者、スタッフ支援にとどまらず、講演活動や事業を通して、行政や他施設と連携し、地域他職種へ教育・研修を行うとともに、現場で有益なアセスメントツールを研究し、患者および支援者に還元することは、臨床と研究、教育の3つをうまく関連させた取り組みであり、現場で求められる心理療法士のモデルになると考える。

がん領域の立場から

四国がんセンターの井上実穂氏には、週2日の勤務から常勤となったこれまでの10年を振り返り、がん領域で働く心理療法士の立場から報告いただいた。四国がんセンターにおいて心理療法士は、入院・外来問わず、患者やスタッフに対して自由に動ける環境の中で、カウンセリングやコンサルテーション、グループアプローチ、研究活動など、さまざまな取り組みを展開している。

がん領域で働く心理療法士として、①患者および家族の心理面接の中で相手に合わせて精神分析や行動療法、解決指向アプローチなどを行い、言語面接だけでなく、箱庭や絵画を用いてアプローチしてきたこと、②身体やがんに関する知識、喪失体験や死に関する理解、法律や社会資源に関すること、他職

種との関わりによる多面的アセスメントの視点と多様なアプローチについて実務を通して学んだことが報告された。また、③グループ療法を用いた患者サロンを立ち上げ、患者同士の出会いの場を提供したり、これまで家族ケアの対象外であった患者の子どもを支援するプロジェクト=チャイルドケアプロジェクトを立ち上げ、多職種チームへ貢献していた。

がんという病に向き合う患者や家族のさまざまな思いを丁寧に汲み、その苦痛を和らげるためにできそうな工夫を他職種と連携しながら取り組むプロセスや関わり姿勢は、他の疾患にも応用できるものであり、他施設で働く心理療法士にも参考になると考える。

指定討論

沖縄病院の徳永雄規氏は、看護師のキャリアパスや経年別教育を例に挙げ、やってきたことを次の世代にどう伝えるか、どんな心理療法士を育成したいと考えるかを念頭に置き、新人教育、管理者研修を組み立てることが教示された。

花巻病院の八木深氏からは医師と管理者という立場から、チームという視点の中で求められる専門職のあり方が示された。その上で、「ここからは私の仕事でないと“切る人”」ではなく、「お互いができる部分を増やす“つなぐ人”が大事」であること、心理療法士へ期待することとして「つなぐ人」になろうと提案された。

意見交換の中では、心理療法士としてどんなことをやっているのかもっと教えてほしいという他職種からの意見や1人職場や新規雇用で心理療法士とし

てできることをどう他職種に伝え、業務に取り組んでいくか、どのように周りにつながるのか模索していたという声が上がった。

まとめ

今回のシンポジウムを通して、心理療法士が他職種と協働するのは日々の臨床だけでなく、研究や教育の実践も含まれることが明らかとなった。さらに、心理療法士が行うアセスメントや心理支援はがんやHIV、精神疾患など領域にかかわらず、患者・家族だけでなく、他職種とつながり、他職種と患者をつなぐことにも有用であることが示された。また、心理療法士として個別の面接やアセスメントは現場で活用できるスキルであるが、グループのファシリテーターや他職種と共有できるアセスメントツールの活用、専門領域の医学的知識の習得は実務を通して身につくものであることが共通していた。

今回の内容を踏まえ、臨床・研究・教育を実践できる心理療法士として、専門性を向上するための教育体制や研修システムの構築だけでなく、他職種とつながり、連携するために必要な知識やスキルも学べる体制を整備していくことが必要であると考えられる。

〈本論文は第70回国立病院総合医学会シンポジウム「多職種チーム医療における心理療法士のスキルと有用性」において発表した内容を座長としてまとめたものである。〉

著者の利益相反：本論文発表内容に関連して申告なし。